

はしがき……………秋山 虔……………一

研究篇

源氏物語の文章……………神尾 暢子……………七

——六条四町の植物描写——

源氏物語の物名歌の表現……………阿久澤 忠……………三

「野宮」の別れの〈語り〉の遠近法……………東原 伸明……………五

——「賢木」巻始発部の言説分析——

古代語出来文における尊敬語の待遇対象……………川村 大……………八

——出来文の「主語」とは何かを考えるために——

「対象提示」と「解釈」……………仁 科 明……………一〇九

——源氏物語の連体形終止文——

『源氏物語』の敬語表現……………藤原 浩史……………三七

源氏物語の「花の顔」と遊仙窟……………新間一美……………一六三

——漢詩文表現との関わりから——

「あやしくらうたげ」なるひと……………塚原明弘……………一九二

——「夕顔」巻の二つの語脈——

淘汰された定家筆本源氏物語……………中川照将……………二一九

——《青表紙本》形成のモノガタリ——

『源氏物語』「梅枝」巻の書、書物と手紙……………陣野英則……………二四二

——「雨夜の品定め」との照応を手がかりに——

『源氏物語』の会話文の諸問題……………池田節子……………二六七

——閉じ方と敬語の問題を中心に——

追憶と鎮魂……………高橋文二……………二九三

——光源氏晩年の日々——

資料篇

源氏物語古系図(巢守三位本)解題・翻字……………高田信敬……………三九

研究篇

表現の方法 複数映像の点綴

文学作品には、多数の素材がある。ある場合には、その素材の存在を表現し、ある場合には、その素材の状態を表現する。いずれにしても、素材の存在だけを喚起するのではなく、素材の表現映像を喚起する。そういった表現映像は、一般的映像から個別的映像までに整理しうる。^(注1)閉鎖的な貴族集団に成立した王朝物語では、この表現映像の理解が、とりわけ重要になる。たとえば、伊勢物語第四段で、男が通っていた女が、男の手の届かない某所に赴いた暦日を「正月の十日ばかりのほど」と規定する事例がある。その翌年の「梅のはなざかり」に、男は、女との思い出の場所に出かけた。「月やあらぬ春や昔の」という和歌のためなら、暦日を限定しなくてもよかつたはずである。だが、暦日を限定したのは、藤原高子と在原業平との公的転換暦日を暗示し、かつ、男が、恋人不在を慟哭する時間をも示唆するためであつた。^(注2)一見、特別な意味を加担すると思えない素材も、その素材でなければならぬ必然性が存在するのである。

こういった観点からの研究は、個別単語の次元にとどまらず、文章表現の次元でも展開される。その一例が、鈴木日出男説である。「何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすぐくも見ゆるなりけり」(『源氏物語』帯木)という、自然の風景も、それを見る人の心の風景だとの指摘に立脚する。それを、源氏物語絵巻という視覚的観点から考察すれば、草木の揺らぎが、登場人物の心理を象徴することになる。^(注3)

いわば、素材は、その文脈において、複数の機能を荷担するといえよう。そういった傾向は、一個の事態を複数の視点で表現することとも軌を一にする。^(注4)複眼的視点による文章が、源氏物語の特徴といえようか。その複眼的視点による文章の具体を、源氏物語六条院の庭園にある植物の描写によつて検証したい。

庭園は、邸宅外部への情報と邸宅内部での情報とを発信する。外部への情報は、規模である。広大であれば権勢や財力を物語り、狭隘であれば、下位貧困と解釈させる。また、外から見える樹木の状態によつては、「木立前栽などな